

学

園

長

だ

よ

り

第44回

これからも宜しくお願いいたします。

愛知淑徳学園学園長

小林素文

愛知淑徳学園創立120周年記念祝典・コンサートの
フィナーレはチャイコフスキー交響曲第4番第4楽章。名古屋

フィルハーモニー交響楽団(以下、名フィル)のメンバーが、必死
に演奏する共演の淑徳生を、音の力で教えるもう一つとして
いたからなのでしょう。素晴らしい響きに感動いたしました。

アンコール曲は勿論校歌。出演されたいずれも淑徳卒業
生の、シンガーソングライター八神純子さん(声量がすご
かった)、元宝塚の鶴美舞々さん(空中高く放り上げたバトン
がよく取れましたね)、テレビ朝日アナウンサーの林美沙希
さん(アドリブを交えての軽妙な司会はさすがです)、フリー
アナウンサーの服部恭子さん(同級生の八神さんとの和やか
なやりとりがよかった)、ヴァイオリン奏者の牧野葵さん
(所属する名フィルとのソロ演奏は緊張感が伝わる名演
奏でした)も加わり、時に観客に向かって指揮をとるマエス
トロのもと、名フィルの壮大な伴奏に合わせて、会場と舞台
が一体となった校歌斉唱。

全てが終わったあと、旧職員や同窓生の涙する姿が印象
的でした。

*

1990年に理事長に就任して以来、90周年、百周年、
110周年、120周年と、4回にわたり学園創立記念祝
典で挨拶をさせていただきました。その冒頭は、全て「お陰

様で愛知淑徳学園は**周年を迎えることができました」
でした。

愛知淑徳の長い歴史のどの一年をとっても存在した、
光り輝く存在になろうと勉学に学校行事に励む生徒学生
たちの淑徳魂、そんな生徒学生たちを厳しくも心温かく
教えるもう一つとしている教職員の熱意、母校をなつかしむ
卒業生の思い、こうした今日の学園を築いてきた目には
見えないものへの感謝の気持ちを「お陰様」に込めたから
です。

百周年、110周年、120周年での祝典挨拶の結び
は、「これから、愛知淑徳は『伝統は、ちとどまらない。』姿
勢で歩んでまいります」でした。

「女子教育は家事と裁縫で十分」とされていた明治時代
に、英語や理科を必須科目として取り入れ「10年先20年
先に役立つ人造り」を目指した愛知淑徳の「進取の精神」
を、百周年からは「伝統は、ちとどまらない。」と表現する
ことにしたからです。

愛知淑徳は、これからも、淑徳らしく、過去に感謝し、未
来を見据え、現在を誠実に歩んでまいりますので、宜しく
お願いいたします。



淑徳ブルーで歌う八神さん



バトンを天井まで放り上げた元バトン部の鶴美さん

このたび、理事長職を退き、学園長職に専念すること
いたしました。

*

45歳から、35年にわたり理事長職を務めさせていただ
いたのは、お支えいただいた方々のお陰です。関係各位に心
よりの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

これからは、学園長として、理事長・学長・校長を支え、
愛知淑徳の、在るべき姿、向かうべき方向を絶えず考えて
いたいと存じております。「学園長だより」も続けてまい
りますので、宜しくお願いいたします。